社会福祉法人　日本介助犬協会

会　長
橋本　久美子

神奈川県

「介助犬」の育成と普及活動などを1995年（前身は任意団体「介助犬協会」）から行っている。「介助犬」とは四肢に障がいを持つ人（ユーザー）のニーズをサポートし、ユーザーが自立や社会参加できるようにユーザーと共に訓練を受け、厚生労働大臣指定法人の認定を受けた補助犬の内の１種のこと。2017年12月現在、全国で68頭が実働しており、うち約20頭の育成を同協会が行ってきた。2002年５月に身体障害者補助犬法が制定され、補助犬（介助犬、聴導犬、盲導犬）は公共機関や商業施設、飲食店などの利用が可能になったが、認知度の低さ故、未だ介助犬を伴った利用を断られるケースが後を絶たず、これを解決しようと同協会では介助犬について正しく知ってもらうためのPR活動にも力を注いでおり、企業や店舗などへ介助犬受け入れセミナーの開催や補助犬同伴可ステッカー貼付の呼びかけ、街頭での募金活動などの啓蒙に努めている。

第50回社会貢献者表彰を受賞して

私ども社会福祉法人　日本介助犬協会は、「人にも動物にもやさしく楽しい社会をめざして」をモットーに、介助犬の育成普及活動により障がい者の自立と社会参加を支援し、動物介在療法・動物介在活動の提供を通して病気と闘う方々に笑顔を届ける活動をしております。

若くして事故や病気で手足に障害を負うことで、自信を失い、挑戦する意欲を失うことになることが多くあります。中でも、進行性の疾患の診断を受けた方は、将来に大きな不安を抱えながら生きていく事を余儀無くされます。障害に加えて自律神経障害により体温調節が出来なかったり血圧の変動が起こったりします。神経症状としてしびれや痛みなどの合併症状があり、常に辛い症状を抱えながらの生活を送る中で、自立する事、外出する事には不安を伴います。外出すれば、段差と坂他のバリアだらけ、家族に負担をかける事を申し訳なく思い、周囲からの心ない反応に「誰も自分のことを分かってはくれない」と心に壁を作ってしまいます。

介助犬は、使用者の指示によって、落としたものを拾って渡し、手が届かないものを取って来て渡し、ドアや窓の開閉やエレベーター等のスイッチ操作を手伝い、寝静まった夜にも体温調節のために冷蔵庫からボトルを取ってきてくれ、転倒などの非常時には携帯電話や電話の子機を探して手元に持って来てくれます。介助犬の訓練は遊びの延長線上で褒めて教える学習の繰り返しで犬自身が作業を楽しんでおり、使用者にとって介助犬への指示は人に介助動作を依頼するのとは全く違う指示となります。また介助犬の世話は補助犬法で自らが責任を持つことが義務付けられています。必要なことは援助依頼をする、自立して介助犬使用者として責任を持った社会参加をし、介助犬使用者として生き直すことで、「死んだほうがマシ」と思っていた人生が、「生

きていてよかった。この子の事をもっとたくさんの人に話したい。もっとこの子と色々なところに出かけたい」という人生に変わります。

犬は使用者を障害者と思っていません。「お腹すいた！　散歩に連れていって！」とねだります。それが使用者自信を元気にするのだと思います。

全国に未だ75頭しかいない介助犬がより多くの障害者に寄与できるように、一人でも多くの方に犬とともに笑顔になっていただけるように、活動を続けてまいります。

社会にこれほど多くの様々な課題があり、その一つ一つに真剣に向き合い、永く地道な活動をしておられる方々がいらっしゃることを知る機会になったことが何よりの私どもの財産になると感謝しております。

この度はありがとうございました。

社会福祉法人　日本介助犬協会
専務理事　医学博士　高柳　友子

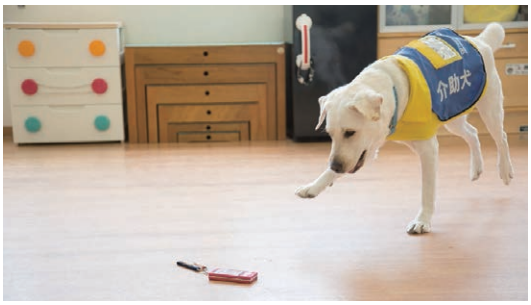
▲街頭募金活動

▲使用者さんたち（使用者の集いイベントにて）

▲店内での訓練

▲当会の総合訓練センター

▲イベントステージ



▲介助動作（携帯電話を持ってくる）

Kyawt Kyawt Khine
（ちょ ちょ かい）

沖縄県／ミャンマー

ヤンゴン大学を卒業後、地元で公立小学校の教員として10年勤め、2005年、国費留学生として東北大学と宮城教育大学で教育法を学び、2011年には琉球大学大学院を卒業した。その後、沖縄の幼稚園で英語を教える中、幼稚園では人として必要な社会性や道徳教育等が行われていることに着目し、ミャンマーとの違いを感じた。一方、母国では貧しさから学校に通えない多くの子供達の存在に胸を痛めていたこともあり、ヤンゴンから１時間30分程の所に、基本的な人間教育をする私立の幼稚園を2013年に開園し、翌年には政府の認可を受けて、私立小学校を設立した。ここには、村長の協力により、貧しい子供が優先的に通っている。その教育内容は、自身が日本で学んだ事を反映させた、“自分の頭で考える”という教育方針で、ミャンマーの仏教が基本の暗記方式とは異なる。６月に新学期を迎えるが、現在96名の生徒が通い、授業料は無料で、教師８名の給与を含めた学校の運営費用は、ほとんどはチョチョカイさんが負担している。授業は、ミャンマーの公立学校のカリキュラムに加えて、美術や音楽、体育、英会話、他にも農業や仏教を学んでいて、日本の学校のように、週３回の給食も提供している。幼稚園で行儀や道徳をしっかり学んだ子供達が、そのまま小学校に進学するが、その評判を聞きつけて、近隣の富裕層の子供の入学希望も殺到している。子供達は、これまで教育を受ける機会に恵まれなかった、自分の親に、歯磨きやごみ捨てのルール、学んだことを家庭で伝えている。

（推薦者：NPO 法人　珊瑚舎スコーレ）

感謝の気持ち

このたび、第50回社会貢献者表彰の受賞者としてこの式に出席することができまして、心より感謝申し上げます。まず、社会貢献支援財団会長の安倍昭恵様をはじめ、私の願いを理解してくださり、ミャンマーにいる家族や沖縄に住んでいる家族のためにビザの手配や、飛行機のチケットの予約まで親切にしてくださった事務局の皆様に、心より感謝申し上げます。また、この賞に推薦してくださった珊瑚舎スコーレ代表の星野人史様と星野知子様にも感謝申し上げます。そして、私の活動を支えてくれているミャンマーの家族、愛の家小学校の職員たち、児童の親御さんたちにも感謝したいです。

式に出席して

私は今までこのような賞をもらったことがなかったので、大変嬉しく思っています。50回までも続いている社会貢献者表彰や、社会貢献活動者たちを支えてくださっている社会貢献支援財団を心より尊敬しております。式で社会貢献のため頑張っている方々と出会って、様々なことを聞くことができて、とても貴重な機会でした。社会のためにいろいろな立場で、また、世界の人々のためにそれぞれの国で活動する映像を見て、涙が出るほど感動しました。安倍昭恵会長から、直接この賞を頂いたことも、私にとっては人生で忘れられないことでした。日本で、こんなにも高名な方にお目に

かかることができてとても光栄なことと思っています。これからの世界は一つになるでしょうから、世界平和のため、自分自身ができることを、自分自身の力で、一緒に良い社会を作っていきたいと思っています。また、良い社会を作る為に、社会貢献支援財団のような方々が支えてくださることも大事なことと思っています。

今後の目標

私は今沖縄で、ロイヤル・ミャンマーというミャンマー料理のレストランを経営しており、その収益でミャンマーの愛の家小学校の運営をしております。愛の家小学校では、私が日本で学んだ教育を活かすことで、単なる暗記教育ではない、日本の教育に似た教育を実践しています。しかし、ミャンマーで日本のような教育をやるためにはいろいろな問題があります。例えば、教室が狭い、先生たちの技術が足りない、教材か不十分、給食を毎日提供する予算がない、などです。また、現在運営しているのは小学校ですが、子どもたちは卒業後、その地域にある唯一の中学校に進みます。うちの小学校は他の学校とは違う教育法で教えているので、うちの子どもたちはその中学校へ行くと色々と難しいことがあると思います。そのため、私は中学校、高校まで同じ教育方針の学校を設立することを目指しています。

愛の家小学校の教育方針を、ミャンマーの中学校、高校まで広げていくにはまだまだたくさんの方々のお力が必要です。これからも皆様のご理解ご支援をどうぞよろしくお願いします。今回頂いた賞金は愛の家小学校の校舎の維持管理のために大切に活用させていただきます。

最後に、社会貢献者支援財団の皆様、日本財団の皆様に重ねてお礼申し上げます。

▲学年終了式で記念写真

▲日本の遊びを取り入れています
ミェッターイエイミュ小学校

渋谷　りつ子

インド

ピアニストを志してウィーンの音楽大学を卒業後、日本へ帰国途中に観光のため1992年にインドのカルカッタ（コルカタ）に立ち寄り、何げなくマザーテレサの家の重症心身障害児施設「ダヤダン・メディカル・センター」を訪れて以来、障害児の養育と訓練（リハビリ）の無償のボランティア活動に明け暮れている。施設は、貧しさから親が育てられず、見捨てられた自分の身の回りの事もできない重度の子どもが多く、過酷な状況に身を置くうちに自分の役割は音楽ではなく、この子どもたちを助けることではないかとの思いから、生活費を全額自費で負担しながら活動を続けている。

（推薦者：渋谷りつ子さんを支える会）

私のコルカタ　マザー・テレサの施設での活動にご理解を賜り社会貢献者表彰を頂くことが出来ましたことは、このうえない喜びであり、心より感謝申し上げます。

思い起こせばこの26年間、マザー・テレサの教え「自分を無にして仕えること」を胸に、彼女の足元にも及ばない自分ですが、コルカタにいる障がい児のお世話をさせていただいてきました。私は施設で、無償のボランティアとしてお手伝いさせていただいております。少しでも長くお手伝いさせていただきたいと、日々の生活は大変質素にしております。

施設では、掃除、洗濯などはすべて手でやっております。電気製品は使いません、64人の障がいを持つ子どもたちが暮らしております。

掃除、洗濯、リハビリ、勉強、治療、食事介助などを、シスターを中心に職員、世界中から来て下さるボランティアの皆様で毎日をこなしております。

私は、このコルカタの地に生かされ、お手伝いさせていただけることを大変うれしく思っております。私の唯一の報酬はそのつど子どもたちから頂くあたたかい愛と笑顔です。これがあるから続けていけるのだと思っております。

子どもたちそれぞれの病状が改善される中で笑顔が生まれていきます。これからも子どもたちの母親代わりを続けて参ります。

今回、同時期に受賞された皆様にお会いしお話をしてそれぞれの社会貢献のあり方を学ぶことができました。私にとって宝物のような経験となりました。

特に安倍首相夫人からは、お声を掛けていただき、夫人がコルカタを訪問された際のお話もし、ご一緒に素敵な写真まで撮ることが出来ました。

２週間の短い日本滞在でしたが、夢のような思い出とともに７月14日にコルカタへと向かいます。１日も早く子どもたちに会いたい！　心はすでにコルカタの空へ飛んでおります。

有難うございました。

▲子どもたちは親に見捨てられてしまっているので生活の全てを母親代りとなって愛情を注がなければなりません

▲施設の中に閉じ込めないよう積極的に外に連れ出します。公園の池でボート乗り体験をさせています

▲短期ボランティアで施設にやって来る日本人のオリエンテーションをするのも渋谷さんの役目。最近日本人の若い人たちが少なくなったのが残念です

▲ただ保護するだけでなく独自に開発した運動機能訓練を毎日どの子にも実行しています

▲インドのコルカタにあるマザーテレサの家で重症心身障がい児の生活介助を25年間無償ボランティアとして働いています

特定非営利活動法人　ANT-Hiroshima

理事長
渡部　朋子

広島県

広島を訪れる留学生へのボランティアグループを前身として1989年に設立。その後、パキスタンのアフガン難民キャンプへの医療支援に取り組んだことをきっかけに、活動領域や人的ネットワークが広島から世界へ広がり、現在の団体名に改称、その後NPO法人となる。「一人ひとりの力はアリのように小さくても、世界各国の人々や団体・諸機関等と協働することで、平和構築を実現できる」と信じ、被爆地・広島を拠点に、国際協力・平和教育活動・平和文化交流などを行っている。

中でも、広島で被爆し、白血病を発症しながら希望を捨てずに千羽鶴を折り続け、12歳の生涯を閉じた佐々木禎子さんを描いた絵本、「おりづるの旅」の多言語への翻訳と世界各国へ届ける活動は、ANT-Hiroshimaを象徴するプロジェクトとなっている。そのきっかけとなったのは、2004年に来日し、広島を訪れたアフガニスタンの少女だった。紛争で片足を失った少女を、ANTが広島の平和記念公園にある「原爆の子の像」に案内し、絵本「おりづるの旅」を読み聞かせた際、彼女が深い感銘を受け、自国の子どもたちにぜひ読ませたいと願ったことが、その後の翻訳活動へとつながった。現在までに翻訳されたのは24言語、これまでに66カ国へ2600冊を届けてきた。

その他、フィリピン、アフガニスタン、ネパールなど、被災した国や紛争地域への国際協力プロジエクトも多数手がけている。すべての活動のエネルギー源は「破壊から再生へ、絶望を希望に変えてきたヒロシマの力」だ。

（推薦者：特定非営利活動法人　食べて語ろう会）

このたびは第50回社会貢献者表彰をいただき、厚く御礼申し上げます。また受賞式において、まさに「地の塩」と呼ぶにふさわしい素晴らしい受賞者の団体、個人の皆様の存在を知り、深く感動いたしました。このような貴重な出会いをいただいたこと、そして、これまでとこれからを考える、またとない機会を得たことに心より感謝申し上げます。

1945年8月6日、人類史上初の原子爆弾が広島に投下されました。それから8年後の1953年、私は被爆者の両親のもとに生まれました。20歳の時、祖父を亡くしたことをきっかけに、死の意味、生の意味を深く考えるようになり、それから「自分が広島に生まれた意味は何なのか？」と自身に問いかけるようになりました。当時、大学生だった私は、復興途上にあった広島の街を歩き回り、多くの被爆者の方々やその支援者に出会い、その言葉を心に刻みながら、「ヒロシマとは何なのか、何を意味するのか」を探し回りました。（カタカナで書くヒロシマは、原爆の被害を受けた広島を意味します）そして卒業時に分かったことは、私は何も知らない、であれば自分の生涯を通して「ヒロシマ」の意味を理解していくしかない、ということでした。

その想いから、平成元年、私は「アジアの友と手をつなぐ広島市民の会」を設立し、小さな草の根の平和活動をスタートさせました。その後、特定非営利活動法人「ANT-Hiroshima」に改称し、多くの市民の皆様のご協力のもと、30年間変わらずこつこつ

と活動を続けてきました。活動の幅は国外へも広がり、国内外で４つの事業、12のプロジェクトを展開するまでになりました。

○広島で被爆し、生きる望みを折り鶴に託しながら、12歳でその生涯を閉じた佐々木禎子さんの物語「おりづるの旅（うみのしほ著）」「Sadako's Prayer（ファウジア・ミナラ著）」を多言語に翻訳して世界中へ広める活動 ○被爆樹木を守り育て、その意味を伝える活動 ○ルワンダの子どもたちへの奨学金支援 ○国内外の平和活動家や研修生の受け入れとサポート ○教育現場での平和や国際貢献についての出張授業　など、その他にも様々な活動を実践しています。

「絶望を希望に変える」というヒロシマの願いを実現すべく、ANT はこれからも一人一人との出会いと信頼関係を大切に、平和のために行動する人や団体と協働していきます。「仲間と共に大地を這う」をモットーに、これからも変わらず働き続けるアリ（蟻＝ ANT）でありたいと思っております。ありがとうございました。

▲2006年サダコの絵本プロジェクト　パキスタンにて

▲2008年パキスタンでのサダコ絵本の読み聞かせ

▲2008年ブルキナファソ訪問

▲2017年サダコの絵本プロジェクト　ネパールにて

▲絵本プロジェクト見本（現在25言語）おりづるの旅

▲学生ボランティアによる翻訳シール版の絵本製作

特定非営利活動法人
アジアの障害者活動を支援する会（ADDP）

会　長
前島　富子

東京都

会長の前島富子さんを中心に1992年に発足し、主にラオスのビエンチャンで障がい者のスポーツ振興と就労支援を行っている。特に力を注いで支援している「車椅子バスケットボール」はサークルのような遊びから始まったが、次第に本格的なチームへ成長を遂げて、今では４つのローカルチームが誕生し、アジアの強豪に数えられるまでになった。ADDP の働きかけで、日本政府の支援で障がい者用体育館が建設され、他にも多くの障がい者スポーツが盛んになった。就労支援として、クッキー作りを学ぶ「ベーカリー研修」を行っていて、作り方を学び、販売も研修生が行う。TOYOTA ラオスが販促用に購入してくれたことを皮切りに今では50社以上の取引先がある。また、ろう者への職業訓練が無いに等しかったので、美容院を経営してそこで美容研修を行うことにした。定期的に日本から講師を招き、日本流のおもてなしを学んでもらう。すでに独立開業している研修生もいる。ADDP の活動が縁となり、ラオスと日本の国交樹立60周年を記念した桜の植樹が北部フアパン県で2015年に行われている。現地の障がい者が京都から訪れた植木職人の指導を受け、桜守として桜を育てている。

（推薦者：社会福祉法人　太陽の家）

「私たちはラオスに燃えている」

私たち「アジアの障碍者活動を支援する会」は、1992年任意団体として設立以来、26年間アジアの国々を回って、障害を持つ人々の現状調査を始め、障害を持つ人々が自立した生活を営むまでの現地活動に積極的に介入し、支援を始めてきた。無からのスタートには、困難があったが、先ずは、障碍者のリーダーの養成をスタートにして、地域社会との交流、障碍者同志のエンパワーメントの支援を続けてきた。

インドシナ半島の内陸のラオスは、世界の福祉情報は、あまり届いておらず、家に閉じこもった障碍者を、如何に、外の景色に馴染ませるかは、苦労の連続だった。しかし、ラオス支援を決定してから、大きく変化し、現在はラオスを中心とした障碍者の力を社会に理解してもらうツールとして、スポーツを選び、その感動を伝えようと、みんなが夢中になって車椅子バスケットやゴールボウルに挑戦している。アセアン域内のスポーツ大会でメダルを取ることが夢だったが、昨年のマレーシアアセアン大会では、メダルを８個もゲットし、政府も驚いて、スポーツの力、障碍者の力を認めるまでに変わった。

私たちは、高度なスポーツだけではなく、万人のスポーツとして、ユニバーサルスポーツを通して、誰もが参加できるフライングディスク、卓球バレー等をも推進している。すべての障碍者が、スポーツに気楽に参加させるためには、簡単なスポーツメニューも大切である。こうした私たちの支援努力は、ラオス政府を動かし、教育スポーツ省の中にも担当部署も生まれて、現在では、全国障碍者スポーツ大会を開催するま

で、大きく変化している。

スポーツの推進だけでは、自立にはならないため、就労支援も並行して実施し、スポーツで会得した、やる気や根性や、練習の苦しさや、勝つことの喜びなども学び合い、スポーツを楽しみながら就労プログラムにも力を注いでいる。中でも、知的・聴覚・脳性まひの女性たちのクッキー作りは、高度な技術力を産み、今は、どこにも負けないクッキー作りで販路を拡大し収益を得るまでに至っている。クッキーだけではなく、ポリオや聴覚に障害のある女性たちに、美容研修を５年間実施し、自ら美容院を起業したり、ラオスの他の職場への就労に至るまで、確実に働くことから得た、収入の大切さを学び、閉じこもった障害のある仲間たちを誘い合って、スポーツを通して仲間のコミュニケーションを培い、就労へのチャンスをお互いのネットワークで順調な就労体制が整ってきている。

私たちの最初の支援は、車椅子バスケットに力点を置いたが、いまや、ラオス18県にチームが結成するまでに発展し、そのチームメイトが丸ごと、電化製品の修理やオートバイの修理・車椅子の製造販売まで手掛けるようにもなった。

ラオスはベトナム戦争時代の不発弾が山野にあり、その不発弾による爆発事故や、失明や両手足を失って、どん底に突き落とされている子供や、村人たちの生活を脅かしているが、こうしたアクシデントの障碍者が多く居て、そうした人たちへの支援も、多くの協力者の支援の下で頑張ってもいる。

障害があっても生きる望みを与え、何かしらの就労を見出し、スポーツを通してモチベーションを高め、新たな人生にチャレンジしている障碍者が多くなった。

ラオス一国支援から19年。福祉の制度のないラオスでは、私たちのような、NGO が海外からの支援団体と情報交換しながら、通りすがりの単年度支援ではなく、腰を据えて、コツコツと途上国のバリアを越えながら共生してゆく活動が大切である。

この度、はからずも、受賞の栄を賜った。新たな思いに火がついて更に支援への高揚感に満ちている。

今後もしっかりと、福祉外交の思いで、頑張ってゆきたいものである。

▲ラオス対マレーシア国際大会

▲美容研修

▲クッキー製造研修

シスター白幡　和子／シスター吉田　富美子

シスター吉田（左）　シスター白幡（右）

シエラレオネ

シスター白幡は1974年にシエラレオネ西部のルンサに派遣され、幼稚園や小学校で少ない教材や習慣の違いに苦労しながらも、家庭訪問を日課として合計32年間、主に女子の教育に従事した。シスター吉田はナイジェリアやインドネシアなどで建築関係のプロジェクトに従事し、若者へ技術習得や就労支援などを行った。2012年にシエラレオネに派遣され、翌年に発生したエボラ出血熱の流行時には危険を顧みず村の子どもたちに食料の配布などを行った。

（推薦者：海外邦人宣教者活動援助後援会）

この度、公益財団法人社会貢献支援財団より、社会貢献者として表彰していただき、第50回社会貢献者表彰式典に参列することができました。財団会長安倍昭恵様をはじめ、事務手続きのために忍耐強くお付き合いくださいました担当部署の皆様に、心から感謝致します。今回の授賞式に参加し、実に様々な方々が、様々な分野で、人々の支援をされておられることを知りました。前日の懇親会では、受賞者だけでなくそのご家族とも知り合いになれました。お互いにメールやLINEを交換し、もう一つ知り合いの輪が広がりました。

私は、西アフリカ・シエラレオネ共和国の田舎町ルンサと言うところに、2012年より宣教師として派遣され、主に建築プロジェクトをとおして地元の青年たちへの技術指導による生活自立支援と、高校を卒業して良い成績をとっても経済的に大学に行けない生徒の教育支援をしております。小さな一歩ですが、毎日の一歩の積み上げによって、少しずつでも、しかもシエラレオネの中のほんの一部分ですが、青年たちが自分の生活の自立をめざし、さらにより良い生活をすることが出来たらと、祈りながらの毎日です。

これからも多くの方々の支援を無駄にすることなく、一人でも多くのシエラレオネの方々が、幸せに生活できるよう手助けしていきたいと思っております。

宣教クララ修道会　シエラレオネ地区　シスター吉田　富美子

▲日本からの給食支援

▲エボラ熱流行時の村回りの様子（シスター吉田）

▲マグボダ村のキッチン
ビンを使ってピーナツバターを作っています

▲子どもたちと一緒に

▲週に１回二つの村の小学校をに行きます

▲活動を共にされ亡くなられた故シスター根岸が生涯をかけて作られた職業センターの卒業式

▲卒業式のミサ

冨田　江里子

NPO 法人 NEKKO（助産師）

フィリピン

1997年に、日本の小さな NGO（IKGS ＠兵庫県山南町）の植林事業の現地コーディネーターとして活動する夫の富田一也氏に合流して以来、20年にわたって西ルソン・サンバレス州・スービック町で暮らしている。地域の最貧困層の女性たちのための助産院（セント・バルナバ・クリニック）を運営している。2017年６月現在までに、4,500件の出産と産後訪問ケア、６万人を超える貧困層のあらゆる病人のケア、先天性心臓奇形児などの手術費用支援などを行ってきた。

（推薦者：清水　展）

この度は私の活動を、社会貢献者表彰に選んでいただき本当に感謝しております。数多くの受賞者の方々と並び、豪華な式典に参加させていただけたのは、身に余る光栄でした。

フィリピンで NGO 活動をする夫と共に貧困層のエリアに住み、21年が経ちました。21年前のフィリピンの地方都市では、病院は支払い能力のある患者だけのために機能し、貧困層は取り残されていました。お産も、産婆が無理に気張らせて、おなかを押してというやり方が普通で、自然に待つという本来のお産がなく、その結果、死産や難産も珍しくありませんでした。「病院に行っても貧しい者は後回しにされる、相手にしてもらえない、お産はお腹を押して産ませるもの」という現地の貧困層の声に驚き、お金がなくてもできる看護があるはず、お産は自然経過を見守れば亡くならなかった命もあるはずだと、小さな診療所を立ち上げたのが18年前です。

今日までに小さな診療所で、4,973人の赤ちゃんの誕生に立ち会い、７万人を超える貧しくて病院へ行けない患者さんたちのケアに関わらせていただきました。24時間体制でお産に付き添い、産後は訪問ケア、エリアで出会う栄養失調児に給食、ミルク支援、保護施設への搬送、ネグレクトなどで保護が必要な子どもたちへのデイケアの実地、診療した患者さんが重症であればその後訪問にて経過観察し、必要あれば病院へ運び、治療が受けられるように支援、心臓奇形など手術が必要な子どもに支援を集め手術、とその時その命にとって必要と思われることを実践してきました。予防医学の活動は食事や日々の健康法などを紹介しています。このような活動が18年間もできてきたのは、多くの支援者の方が常に支えて下さったからです。

現地の人と関わる中から、昔ながらの生活が支えていた身体特性や、現地の伝統医療、病気の変遷など気づかされたことも多く、活動と学びもシェアしたいと日本から

の訪問ボランティアの受け入れなども行ってきました。

近年はフィリピンの地方都市でも、貧困に対する医療状況も改善され、貧しさで医療が受けられないという状況は無くなりつつあります。しかし経験上、病院を恐れる貧困層がまだまだ多数いるのは事実で、すべての貧困層が簡単に病院へと向かえる訳ではありません。求める方がある限りは貧困層が安心してお産できる場所として、病院へ行けない患者のそばで支える者として活動を続けたいと考えております。

▲ゴミ集積所に住む人々の往診をする様子、腐敗したゴミが燃やされて異臭がする中、病院に行くことができない貧しい人々を訪ね歩く

▲ゴミ集積所で出会った子供は高熱で朦朧としており、怯えていた。診療の前に落ち着かせるために抱きしめて安心させる

▲貧しい母子のための診療所で生まれた赤ちゃんと、その母親

▲貧しい母子のための診療所での診療風景。この診療所では一切の支払いがない。貧しい人たちが支払いを気にすることなく、笑顔でいられる

▲貧しい母子のための診療所での診療風景。手で触れて、会話をして、患者の不安と寄り添う

▲貧困地域での往診の様子。日本のような便利な道具はない。野菜や魚の重量を計る簡易式のスケールで赤ちゃんの体重を測る

山勢　拓弥

カンボジア

2013年にカンボジアのシェムリアップに日本語学校を設立し、無料で日本語を教えている。きっかけは、同国にボランティアで訪れた際、偶然訪れたゴミ集積所で危険を冒して働いている子どもたちが「観光ガイド」「医者」「ゴミ拾い」以外の職業を知らないことに衝撃を受けたこと。英語と日本語が出来れば子どもたちにとって憧れの職業「観光ガイド」になれる可能性が高くなると考えたから。現在、15名の子どもたちが学び日本語検定３級に合格し、専門学校へ進んで観光ガイドや日本企業への就職を目指すほどの成果を上げている。また、子どもたちの親が安定した収入をえられるように、バナナの木の繊維から紙を作ることを思いつき、世界初の水に濡れても破れない「バナナペーパー」を製造。バナナペーパーを使った商品を製作販売し、８人のスタッフを雇って比較的安定した収入を得ることが出来ている。

（推薦者：喜多　悦子）

ゴミ山と聞いてどんなところを想像するだろうか。カンボジアに初めて旅行しに来たときにカンボジア人に聞いた「ゴミ山」という単語。僕は小学４年生のとき、社会見学の際に行った福岡県のゴミ処理施設の匂いと光景を思い出した。

僕がカンボジアに初めて来たのは2012年５月、住み始めたのは2013年４月だから、初めて来てから「移住する」と決断するまでに１年もいらなかった。当時、大学１年生だった僕は、机上の空論にすぎないと決めつけていたつまらない講義は、暇つぶしにもならなかった。退学届けとカンボジア行きのＥチケットを握りしめ、両親に自分の覚悟を話したときは呆れた様子で最初は話しさえ聞いてもらえなかった。今思えば、そのときのワガママな感情を19歳なりの言葉に直してぶつけただけだから納得してもらえないのも当然だったと思う。「あんたは昔から頑固だからねぇ」と最終的には僕の想いを理解して送り出してくれた。

ここまでして僕がカンボジアに行きたかったのには二つの理由がある。

一つ目はただ純粋に楽しかったから。高校という小さな社会から脱出した後も、大学という社会に馴染めずにいた。コンビニでの初めてのアルバイトも勤務態度のせいで１ヶ月でクビになった。そのときに出会ったカンボジア。自由な空気、暖かい気候、そして経験豊かな在住日本人たちとの会話は当時の僕には将来のことなどどうでもいいと思わせてくれるほどに新鮮だった。

二つ目は「ゴミ山」という存在を目にしてしまったから。初めて行ったカンボジアのゴミ山。教科書でフィリピンのゴミ山、通称「スモーキーマウンテン」を知っていたが、実際にゴミ山を見るのは教科書で見るよりも臭くて、汚くて、圧倒された。使用済みの注射器やガラスの破片などが散乱するそんな劣悪な環境で働いている人たちがたくさんいた。子どもたちもいた。「なにかできることはないだろうか」そう思ってから、行動に移るまでは早かった。日本語も英語もできない現地の人たちにカンボジアの言葉を教えてもらいながら、ゴミ山の実態やそこでの生活など、疑問に思うことは全て聞いた。その中で引っかかったキーワードが「選択肢の少なさ」だった。子どもたちには将来、ゴミ山で働かないでいいように、できるだけ外の世界も知ってもらおうと日本語学校を設立した。大人たちには安心して働けるように、村で一緒に働こうと呼びかけた。最初はミサンガや麻紐のバック作りなど簡単なものしかできず、苦しんだ。貯金も底を尽きた頃に、紹介してもらったバナナペーパー。バナナの茎から紙を作るプロジェクトが今は10人の雇用を生んでいる。

第50回社会貢献者表彰にノミネートされたときにはすごく驚いた。なぜなら僕は自分が好きで楽しいと思うことしかやっていないからだ。楽しくてカンボジアに住み、「なんで？」という疑問が僕を動かしていただけだからだ。でも、楽しいと「なんで？」がモチベーションの僕は地球上の誰よりも幸せで、最高の人生を送れると自負している。自分の楽しいが誰かのためになる。そんな社会を僕は作っていきたいと思う。

▲自然の恵みで作ったバナナペーパー

▲ポーチの柄は全てカンボジアの自然や人々、文化などから影響を受けたもの

▲カンボジアにあるバナナペーパーショップ「Ashi」

▲バナナペーパー工程「漉く」

▲バナナペーパー工程「切る」

▲バナナペーパー工程「デザインする」

▲バナナペーパー工房の様子

NPO 法人　沖縄県自立生活センター・イルカ

代　表
長位　鈴子

沖縄県

障がい者が自ら運営し、障がい者に介助者サービスを提供する「自立生活センター」は日本国内に124カ所あり、1972年にアメリカのカリフォルニア州で設立された団体。

沖縄県内にも５団体あり、その中心的役割を1999年に設立されたNPO法人沖縄県自立生活センター・イルカが担っている。代表の長位さんも、事務局長のチャイ・スーファンさんも車いすでの生活をしているが、当事者でないと、相談者への的確なアドバイスは難しく、団体の意思決定機関の責任者は障がい者で、構成員も半分以上は障がい者と定義されている。

インクルーシブ社会実現に向けた事業の内容は、①自立生活プログラム事業　②ピア・カウンセリング事業　③相談支援事業　④インクルーシブ教育推進事業。

以上の事業を柱に、親亡き後、自立生活に関心がある重度障がい者に向けて、「自立生活塾」と題した宿泊を伴う研修、絵本の読み聞かせ、インクルーシブ教育を実施している。また啓発活動を目的として、今年で５回目となる健常者・障がい者を交えた運動会を行っている。

「重度障害者の地域生活から見えてきたもの」

沖縄県自立生活センターとして1995年に新門登氏を代表として任意団体を立ち上げ、1999年に彼のサポート体制を確立するためにNPO法人を取得し、現在に至ります。

前代表の新門氏が生前言葉にしていたことは、「どんなに重度の障害者でも地域生活を可能にするよう、行政に働きかけていこう。自分たちはまだ言葉が言える障害者だが、今後は重複障害をもつ人でも、医療ケアを必要とする人たちでも、地域生活ができるようにみんなで力を合わせて頑張ろう」でした。

私は、彼の生き様及び関係づくり、行政機関への働きかけ方の感銘を受け、一緒に沖縄を変えていきたいと心底思いました。それと同時に、当時はまだまだ障害者施策に不備の多いままで、介助が必要な障害者にとっては無償ボランティアに頼らざるを得ないため、ボランティアが来ない日も多く生活がままならないだけでなく、生死に関わることも多くありました。

2003年から福祉施策が大幅に見直され、その後NPO法人でもヘルパー事業を設置することが可能となりました。その追い風に乗って、自立生活センターを基盤に沖縄で障害者運動・地域生活事業（ヘルパー事業）を展開し、多くの障害者が施設・病院や親元から自立（単身生活）をすることができました。

2006年に「障害者権利条約」が国連で採択され、日本国内の各障害者福祉制度が整備されはじめ、2014年に批准されました。“障害”のとらえ方も「医学的モデル（ADL）」から「社会的モデル（QOL）」にパラダイムシフト（考え方を変える）することが急務であるが、障害当事者や家族、福祉従事者、医療従事者を含む社会全体の人たちの

意識を変えることが必要であると思います。そのために今、自立生活センター協議会（JIL）に加盟し、全国各地の仲間たちとともに共有し社会全体へ様々な活動を続けています。

今、沖縄では重複障害者（身体・知的）の自立に向けて、取り組んでいるところです。重複障害者の自立生活については、日本の中でも情報や取り組みが少ないため、施設やグループホームありきの自立という偏りが見られます。親なき後も「その人らしい生活」というよりも、家族や支援者が安心したいがための将来設計になることが多く、それを私たちは問題視しています。

当事者が考える“障害”とは「社会の障壁」であり、障壁とは障害があるだけで情報不足・経験不足に陥ることをいい、そして大切な事は“自分の人生を生き抜く力”をつけていく事だと強く感じています。それには自ら社会に出ること、そして社会を信じ、地域の人たちと強い絆をつくることが求められています。

▲障害あるなし関係なく皆の大運動会

▲県議会議員向け勉強会

▲自立生活塾

▲熊本の障害のある被災者ための募金活動

▲障害平等絵本読み聞かせ

北洋建設株式会社

代表取締役
小澤　輝真

北海道

故小澤政洋氏によって北海道札幌市に1973年に創業し、企業として刑務所からの出所者の雇用と精神的なサポートを行って更生保護に携わってきた。現在、経営は息子の小澤輝真氏に引き継がれ、輝真氏は難病の脊髄小脳変性症を患いながらも更に活動を拡大させ、これまでに500人以上を雇用している。

私は北海道札幌市にある北洋建設株会社代表取締役小澤輝真です。

この度は、日本財団から紹介を受けましたが、大変有意義な賞があることを知り、まず感銘を受けました。社会貢献者賞をいただき誠にありがとうございます。

授賞式の前日には前夜祭と終了後のパーティーがありましたが、とても楽しかったです。その席ではいろんな方の活動を知り、感銘を受けました。例えば、人命救助などでは自分の命を失ってまでも人を助けたりすることなどもありました。

写真撮影では式典で紹介していただいたスライドの個人写真撮影をしていただきありがとうございます。

当社では障害者も雇用していますが、実際に国内で支援している方と知り合いになれて大変有意義でした。

当社は45年以上500人以上にわたり刑務所からの出所者の雇用と再犯防止に力を入れています。犯罪者の再犯防止をすることで被害者を守ることができるという考えのもとでやっています。

このたびは総理の奥様が会長と言う事で、大変懇意にさせていただきました。

刑務所からの出所者のなかには下着の替えさえも持っていない人がいるので、雇用するために交通費なども含めて１人につき平均で40万円かかりますが、土地などを売って20万円は実費で払っています。この度、日本財団から副賞として50万円をいただきましたが、これは刑務所からの出所者雇用の費用にあてさせていただきます。大変感謝しています。

私は脊髄小脳変性症という病気で余命がありますが、実際辛いですが私が動くことで元受刑者にも勇気を与えることができると思っています。この取り組みは日本でほとんどいないので一人でも多くしてもらうためにやっています。法務大臣にも何回も

会っており、元受刑者のために直談判もしています。

　是非当社のホームページなどもご覧ください。インターネットでもよく取り上げられているのでそちらもご覧ください。

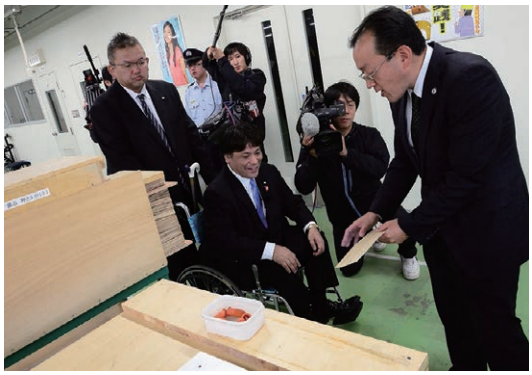
▲アスベスト特別教育講師

▲市長との懇話

▲小学校での講演

▲早稲田大学での講演

▲鈴木たか子議員と


▲旭川刑務所

▲旭川刑務所講話

登校拒否を考える親と子の会・ブルースカイ

代　表
松田　恵子

長野県

1990年、まだ登校拒否についてあまり知られていない頃に発足。わが子の現状と将来に不安でいっぱいのお母さん方５人の会で始まった。現在、代表を務める松田さんは、当時は子どもにどう対応したらいいか、誰に相談したらいいのかわからず、親子で死ぬ思いの葛藤があった。また対子どもの悩みだけではなく、姑・親戚・学校・知人からも、“あなたの育て方が悪い”“将来大変だよ”と言われ深く傷ついた事、沢山の苦しみをお母さん一人が抱える現状は、28年経った今もあまり変わっていない。当時、深い悲しみと苦しみを経験した松田さん達は、その後もこの会を通じて、同じ悩みをもつお母さん方に寄り添って、彼女らの話を聞き、自分の経験を伝え、苦しみを吐き出す場所を提供し続けている。また、登校拒否となった子どもたちがいられる場所も提供している。親は、学校に行かなくなった子どもの、将来のこと、その先の就職・結婚のことまでも悩み、この子はもう、人生の目標を持てなくなると感じてしまう。そして学校へ行かなくてもいいという事を受け入れるには時間がかかってしまう。

不安を抱えた母親に子どもは敏感に察知し、更に状況は悪くなる。学校に頼ることも難しく、結局はお母さん一人で子どもに向き合う事が多くなり、そのお母さんの話や悩みにじっくり耳を傾け、一緒に涙し、「よく頑張っているね」と励ますことや、「うちはこうだったよ」と経験談を話してくれる会の存在は、唯一の元気の源になっている。

この度は、長野市で小さなボランティア団体として活動を続けてきました、ブルースカイ（登校拒否を考える親と子の会）に光をあてて下さり、本当にありがとうございました。

1980年代頃から学校に行きづらい、行けない子どもたちが増え続け、毎年新聞には「登校拒否過去最多」という文字が大きく載っていました。

そんな頃、私の小学校３年生の息子がいじめにあい学校に行かれなくなりました。その頃は、「登校拒否」（今は不登校と言われています）について、学校も、相談機関も専門家と言われる方々も「親の育て方が悪い」「子どもが怠けている」「親離れができていない」など、「不登校する子どもや親や家族が問題なんだ」捉えられていて、世間からも「不登校している子と遊ぶと不登校がうつるから遊ぶな」というような偏見の眼も強く、親も外に出る事が怖く、知り合いに合わないように遠くのスーパーに買い物に行くなど、悶々として暮らしていました。周りからは「無理しても学校に連れて行かないと駄目だよ」という事も言われ、親も焦り、何とか学校に行かせようと、なだめたり、おだてたり、時には力づくでも息子を車に押し込んで、学校に連れて行ったりしました。あの頃、虐待という言葉もなく訴えられる事もなかったのですが、今では多分訴えられていた親だったでしょう。その頃の不登校の親たちは多かれ少なかれそんなことまでしても、子どもを学校に行かせようとした親の方々は沢山いました。世間も子どもが学校に行かないで家にいることはいけない事という眼がとても強い時

代でした。親たちも間違った事とはいえ、必死の思いからの行動でした。私も息子を脅迫神経症や円形脱毛症など、病気になるほど追い詰め苦しい思いをさせてから気がついたひどい親でした。

まだまだ偏見の眼が無くなった世の中ではなく、今もなお私が30年前に親として悩んだ事と同じ悩みを抱えて親の会に来られる方がいます。

今回の受賞式でご一緒したみなさまは素晴らしい活動をしておられ、心暖かい活動に感動致しました。そんな方々に出会う機会を頂けた事に感謝いたします。

人で傷ついた心は、人で癒していく事が大切なんだと、長年の活動の中から学びました。

これからも、仲間たちと自分たちのできるところで、できる事をゆっくりやっていきたいと思っています。

本当にありがとうございました。

▲2012年３月　東京から来た若者たちと不登校の子どもの想いを語る会

▲2000年８月　白馬にてキャンプを行いました

▲2010年５月２日　「20周年記念イベント」ブルースカイで育った若者たちが自分の不登校体験などを語ってくれました

▲2011年　松本みすず湖キャンプ場でテントを張ったり、食事作りを楽しみました

▲2010年11月　親の学びの会をしました

▲2015年９月５日　25周年記念イベント開催

認定NPO法人「だいじょうぶ」

栃木県

栃木県日光市で子どもへの虐待を無くそうと、養育が困難な家庭の訪問支援、家に居場所のない子どもたちを預かり、衣食住から保護者の精神的なサポートをする母子の居場所「Your Place ひだまり」の運営、虐待をしてしまう親の回復プログラムなどを行っている。代表の畠山さん夫婦は、里親として県から委託された子どもたちの養育を行っており、2010年から「ファミリホーム虹の家」を運営している。

（推薦者：ニッポン放送「阿部亮のNGO世界一周！」阿部　亮）

理事長
畠山　由美

この度、「社会貢献者賞」という尊い賞を頂き、推薦してくださった方や、選んで下さった審査員の皆さまに心より感謝申し上げます。貧困や虐待などで苦しんでいる子どもたちに、小さくてもできる限りの手を差し伸べたいとの思いで活動してきたことを、このような形で励まして下さり、スタッフ一同、たいへんうれしく思っています。

私は東京で生まれ、両親と妹の4人家族の長女として育ちました。家庭には笑い声が溢れ、物心ついた頃から、この家に生まれて本当に良かったと思っていました。ところが、のちに就職した児童養護施設で、過酷な養育環境の中にいた子どもたちと出会うことになります。親から暴力を振るわれ、何日も食事をもらえなかった子。家の水道が止まり公園でお米をといでいた所を保護された姉妹。私の知らない所で、その家庭に生まれたということだけで苦しみを負わされている子どもたちがいるということを知りました。私は、このような子どもたちに安らげる家庭を提供したいと、将来は里親になることを願うようになりました。その後、結婚して3つ子を授かり、育児に追われていても、頭の中には、いつもそのような子どもたちへの思いがありました。

息子たちが高校を卒業した年に、児童虐待防止のためのNPO法人「だいじょうぶ」の設立メンバーとなり、市の委託事業として24時間の電話相談と子どもを一時的に預かるショートステイを始めました。その時、夫婦で里親の研修を受け、念願だった里親にもなりました。

やがて「だいじょうぶ」は、子どもだけでなく、子育て家庭への支援として、家事や育児の手伝いをするようになりました。子どもを守るためには、その親たちを支える必要があります。頼れる人もなく、孤立した育児をしている親に対して、優しい実家のような存在でありたいと思いました。さらに子どもたちには居場所を作り、そこ

で食事や入浴や洗濯、勉強の支援を行い、乳幼児の託児も開始しています。このように、今後も私たちは様々なことを考えながら、今回頂いた賞を励みとして、さらに活動を続けていきたいと思います。

▲母子の居場所ひだまり：夕食を待つ間の遊びの様子

▲母子の居場所ひだまり：夕食。皆で食卓を囲みます

▲母子の居場所ひだまり：誕生会の様子

▲母子の居場所ひだまり：赤ちゃんの託児の様子

▲キッズルーム：赤ちゃんの食事。離乳のお手伝いもします

▲キッズルーム：赤ちゃんの保育の様子

公益社団法人　おうみ犯罪被害者支援センター

理事長
山田　尚登

滋賀県

2000年当時、犯罪被害者への支援が注目される中、滋賀県守山市に全国で16番目の被害者支援センターとして設立。以来18年にわたり有志ボランティア約30名が、相談の電話を傾聴。時に面談から法律相談につなげ、警察・病院への付き添いや裁判の傍聴、子どもを殺された家族には、裁判も終わり何年か経つとみんなの記憶からも忘れさられ、喪失感を感じる事から、命日にはお花を届ける等、被害者や家族の心情に寄り添った活動を続けている。

ボランティアは10回の講習（養成研修）を有料（￥15,000）で受講し、１年半の実習、その後面接を経てようやく支援相談員になれる。昨年の対応件数は1,471件（東京6,000件）で、人口比率では全国一の数字。これは犯罪件数に比例している訳ではなく、ひとりに関わる回数が多い、つまり丁寧に何度も何度もひとりの人に寄り添い、信頼関係を構築する支援を続けたからこその数字。他にもデートDVや性暴力予防啓発講座を県内の小・中・高・大学で行ったり、DV相談支援のてびきの作成や、知的障害者に犯罪被害を気づかせ、どこに助けを求めたらいいのかを分かりやすく説明したDVDや絵本を作る活動も積極的に行っている。

57％を占める性犯罪相談を受けて2014年から、性犯罪被害者に対して全国初となる、病院･警察･県・同センターが一体となって総合ケアを行う、性暴力被害者総合ケアワンストップびわ湖（SATOCO）が発足。４団体が協定を結び、被害者の電話にSANE（性暴力被害者支援看護職）看護師が24時間対応し、医療的な処置が終わった後、支援センターにつながる仕組み。

2018年４月、「特定非営利活動法人」からより高い公益性を目指し「公益社団法人」として活動を続けている。

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団様の、記念すべき第50回の社会貢献者表彰を賜りまして心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。全国各地で社会貢献活動に携わっていらっしゃる皆さまと共に壇上に並ばせていただきましたことは、何にもまして名誉なことであると共に、センターの相談員にとりましても活動が認められた事は大きな励みとなり喜びでいっぱいです。

私たち「おうみ犯罪被害者支援センター」は、犯罪の被害にあわれた方やその周りの皆さまへの支援をしている団体です。平成12年、被害者支援に熱い想いを持ったボランティア10数名で立ち上げた当時は、まだまだ被害者への関心も薄く置き去りにされていたような時代でした。

電話相談から始まり面接相談、また支援としては直接的支援（付添支援）、司法・心理・医療・福祉・継続支援など、被害者が望まれる事を必要な限り提供できるように努力を重ねてきました。そして平成26年４月には、性暴力被害者総合ケアワンストップびわこ（通称SATOCOサトコ）を、産婦人科医会・県警・県と共に四者が協定を結んで設立しました。この支援体制は滋賀県方式として全国的にも注目されています。

こうして支援をしている中で、被害にあいながらも声をあげられない人たちに出会いました。子どもや高齢者や障害のある人が被害にあっているにもかかわらず、それを認識できなかったり、どこにどう言えばいいのかわからなかったり、辛く悲しい出

来事を無かったことにしようとしている人がたくさんいることに気付きました。そこで作ったのが「たすけて」の絵本と DVD です。NHK で紹介され、内閣府主催の中央イベントで発表の機会を頂き、全国から「送ってください」との希望が殺到しました。この度、性犯罪の法律改正があったことから、男の子の被害を追加して、内容を充実させた「たすけて２」の絵本と DVD を作り、レセプション会場で紹介させていただきました。

このような被害者支援センターは、各都道府県には１カ所ずつありますが、支援は華やかで目立つような活動ではなく、どちらかというと厳しい守秘義務のもと、一人ひとりに寄り添った活動ですから、世間にアピールすることも難しいのが現状です。

貴財団様から表彰を授与された被害者支援センターは、私たちが初めてだそうです。私たち支援センターと共に、被害者支援の分野に光を当てていただきましたことは、何よりもありがたく心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。

▲絵本「たすけて」の DVD 制作風景

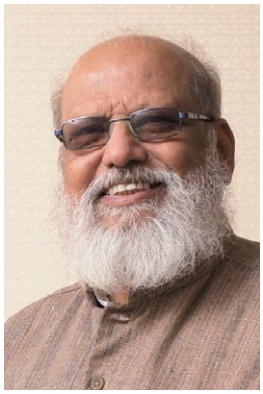
▲「ふたりのよりよい関係をつくるために」デート DV 授業

▲朗読グループ「リーフ」公演

▲付き添い支援

▲電話相談

Uday Haribhau Thakar
（うだい はりばう たかーる）



インド

インドで1970年からハンセン病患者の支援を行っている。未だに厳しい差別に苦しみ、社会から顧みられることの少ない患者、元患者とその家族に治療の機会を提供し、キャパシティ・ビルディング（能力向上・習得）、尊厳の回復、人権状況の改善に尽力した。クシュタログ・ニヴァラン・サミティ（ハンセン病予防委員会）に入会し、同会の医療部門に配置され、マハラシュトラ州のパンヴェルで活動を開始し、185の村落で戸別訪問し総計15,000人以上の患者を発見し、治療に結び付けた。また、同州政府ハンセン病患者リハビリテーション委員会委員に任命され、患者のコロニーを訪問し、障害防止プログラム、マイクロクレジット事業等の実態調査を行った。同州での活動をインド全土に広げるべく、2005年には同国内唯一の当事者団体のナショナルフォーラムの設立に関わり、ハンセン病当事者の指導者の育成に取組み、政府への働きかけの方法やその材料となる情報収集の方法などについて指導した。ナショナルフォーラムは「インドハンセン病回復者協会」として2013年に唯一の同国全国規模の当事者組織として登記された。

私は1970年にハンセン病に関わる仕事を始めました。その間、世界的に有名な社会活動家であり、ハンセン病に関わる活動の創設者の一人である Dr. Baba Amte と仕事をする機会を得て 6 年間一緒に働きました。彼の提案で1982年からはハンセン病の原因究明に全力を尽くすため、Kushtarog Niwaran Samiti、Shantivan、Panvelde で仕事を始めました。

シャンティバンでは、潰瘍、神経痛、反応に苦しむ465人の患者さんを往診しています。私たちは、国家ハンセン病撲滅プログラム（NLEP）の下で、185村と人口 4 万人で構成される Panvel 地区のハンセン病を撲滅するために、インド政府と WHO に協力しています。これまでに15,000件の症例を診断し、それらを治療下に持ち込み、病気から治癒させることができました。

私たちの組織はシャンティバンでリハビリテーションセンターを運営しています。このセンターでは、貧困患者のハンセン病患者に、農業、園芸、配管、製織などのトレーニングを提供しています。このプログラムの下で、Hind Kusht Nivaran Sangh と ALH RRE Society と協力して、500人以上の患者が社会復帰に成功し、尊厳のある生活を送っています。

私は定期的に患者たちが自主的に作っている集落を訪問しています。障害予防プログラムとマイクロクレジットプログラムに関する調査を実施しています。

マハラシュトラ州政府が構成するリハビリテーション委員会の委員として働いていました。現在は、APAL（Association of People Affected by Leprocy）と非常に密接に関わっています。APAL はハンセン病の罹患者によって運営されている全国的な組織で、インドの唯一のフォーラムです。

私はAPALの顧問としての能力を活かし、ハンセン病の罹患者のためのエンパワメントワークショップ、ヒューマンライトワークショップ、トレーニングプログラム、能力開発ワークショップを州と国レベルで組織するのを手伝っています。

世界保健機関（WHO）ハンセン病制圧大使である笹川陽平氏の慈善支援のおかげで、私は人権とハンセン病に関するジュネーブ条約に出席し、論文を発表することができました。

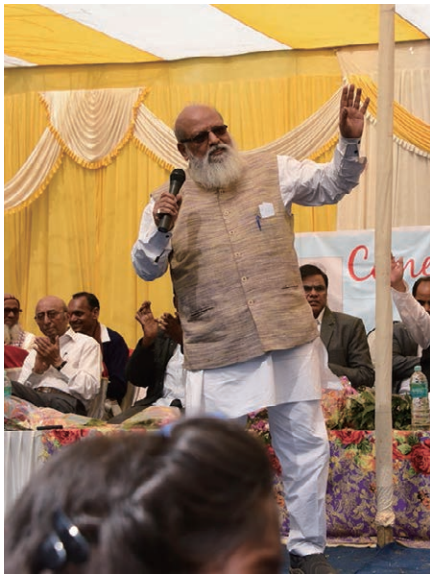
表彰式典は綿密に計画され良くまとめられていました。違う分野で働く人たちや団体と交流する機会となりました。授賞を通じて、他の多くの社会活動家が様々な分野で驚異的な活動をしていることを学びました。

この式典で、この先ハンセン病の分野でまだまだ出来ることがあると触発されました。

最後にもう一度、モチベーションとインスピレーションに溢れた式典を開催してくれてありがとうございました。

▲インドハンセン病回復者協会の理事会（2015年５月）

▲インドハンセン病回復者組織と日本財団との打ち合わせ（2017年12月）



▲ハンセン病蔓延州（ジャルカンド州）訪問（2018年２月）

▲インド保健・家庭福祉大臣との面談（2017年12月）

公益財団法人　真照会

理事長
岡谷　篤一

愛知県

愛知県内の高等学校を卒業し、経済的に恵まれない国立大学等に在籍する学生に修学資金の給付や、名古屋市近辺の国立大学等に在籍する大学生等に対する学寮の無償提供の他、愛知県内の大学等に研究助成を行う活動を続け、昨年100年を迎えた。

名古屋市に本社を置く岡谷鋼機株式会社の10代目岡谷惣助氏が、名古屋市の旧制第八高等学校の生徒を支援するために私財を投じて1917年に創設した。現在の理事長は惣助氏の孫で、岡谷鋼機㈱の社長篤一氏が、祖父の理念と志を引き継いで活動を続けている。学資金は県内の公立高校４校から推薦された25名に毎月３～７万円が支給され、寮は名古屋市の大学に通う10名の学生が利用。食事と電気ガス水道も負担してもらえる。

これまでに支援した学生はゆうに500名を超える。費用の大半は創設者が寄付した自社株の配当を充てているが、不足の場合は岡谷鋼機・岡谷不動産からそれぞれ寄付金として充当されている。同社はバブル期においても決して投資等に揺るぐこともなく、堅実な事業を行ってきたことから、100年もの長きにわたり、この支援が継続できた。

そして、この功績を表立って語ることもせず、学生には会社への入社を条件ともしない、創設者の意思が脈々と３代に亘り伝えられてきた。

このたび、第50回という記念すべき表彰式典に栄誉ある賞を賜りましたこと、格段の喜びであり、心からお礼申し上げます。

著名な企業がかかわる奨学財団が数ある中で選ばれましたのは、私どもの事業が100周年を迎えることができたのが大きな理由と拝察いたします。

1917年４月、岡谷家10代・岡谷惣助岡谷合資会社（現岡谷鋼機株式会社）社長は、智徳礼を重視する英才教育の場を提供し、学資に窮する者に援助し、将来、最高学府を卒えて立派な社会人･国家有為の人材を育成することを目的として学寮（真照学舎）の提供、奨学金の給付の事業を始めました。

真照学舎には設立時からご指導いただいた、旧制第八高等学校初代校長大島義脩氏による『天順人信』の他、大実業家澁澤栄一翁、尾張徳川家19代徳川義親氏、海軍大臣八代六郎氏による書が掲げられており、この偉大な先達に見守られて多くの学生が育ちました。

1938年12月には財団法人となり、その後、戦時中及び戦後の混乱期にも、また、高度経済成長 - バブル崩壊 - デフレ - 低成長と時代が大きく変化する中でも堅実に事業を継続することができました。

2011年４月、公益財団法人に移行しましたが、社会の構造が変化する中で学生の選抜に当っては経済的事由がより重視されるようになりました。素質豊かで将来を嘱望される若者が経済的事由により脱落していくのは、本人はもちろん、国家･社会にとっても大きな損失と愚考いたします。社会発展、日本の各界のレベル押し上げのために

も奨学事業の要請が年々高まっております。これまでの卒業生の皆さんがその後、各界で活躍されているのを見ることができるのは誠にうれしい限りです。

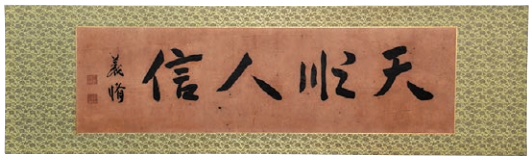
平成30年度におきましては、東大、名古屋大、京大、大阪大、筑波大、東京外大、愛知教育大、名古屋市立大の学生25名に奨学金を給付し、真照学舎には名古屋大、名古屋工業大の学生10名が居住し、中には留学生もおります。年２回の懇親会出席以外はなんら制約を求めず勉学に励んでもらっております。

彼らを含め真照会の卒業生は、今後、世界情勢、地球環境等時代が激しく変化する中でも世界各国の人々と協力し、より良い地域・日本・世界を築くための貢献はできると信じております。社会の各方面で活動し、社会貢献されている方や団体を長きに亘り支援し続けてこられた貴財団からの今回の受賞も大きな励みとして、来年、創業350周年を迎える岡谷鋼機株式会社とともに引き続き地道に事業を続けていく所存です。

貴財団の益々のご発展と関係各位のより一層のご隆盛を祈念いたします。

▲現在の真照学舎　名古屋市昭和区大和町

▲1924年～1941年の真照学舎
名古屋市旧櫻井町（現在の名古屋市昭和区鶴舞四丁目）



▲「天順人信」（義脩）旧制第八高等学校　初代校長であり、その後10年間校長を務められた大島義脩氏の書

▲創設者岡谷惣助会長と真照学舎生
1957年１月２日　岡谷会長宅

▲新年懇親会　役員、事務局と奨学生、真照学舎生
2018年１月４日　名鉄グランドホテル

▲真照学舎バーベキュー会　卒業生も参加
2017年９月30日

一般財団法人ワンネスグループ

共同代表
三宅　隆之

奈良県

2005年に薬物依存に対応する回復支援団体を前身として、その後アルコール・ギャンブル等様々な依存症に悩む人に向けた回復施設、一般財団法人ワンネスグループを奈良･名古屋･沖縄の３都市、８施設で運営し、また、東京、横浜、大阪に来所相談拠点を設けている。特徴は、薬物以外の多種多様な依存に対応し、女性専用の施設を有すること、そして、海外の先駆的回復のための様々なプログラムを現地で学び、その手法を積極的に取り入れている事。また、包括的依存症支援として、予防教育･回復支援・再発防止・雇用創生・専門職化など、統合的なアプローチで、それぞれの利用者に向きあっている。またその手法も日々進化する中で、世界最新の情報を入手し、利用者のみならず、その家族を支えた活動を行っている。

活動内容は、①依存症の本人・家族の支援　②カウンセラーとなる専門家の育成　③回復プログラムの開発　④予防教育　⑤就労支援を柱に、依存症回復支援施設の運営から、依存症を知るセミナーの開催、回復期の利用者が働く場所の提供、家族からの相談に応じたりと幅広い。例えば農業プログラムや犬の世話を通じて信頼関係を築くトレーニング、体を動かしたり、ヨガなど内なる自分に向き合うプログラムも取り入れている。画一的な方法ではなく、それぞれの性格や環境にあったプログラムによって、依存症者を回復に導く活動を13年に亘り続けている。

社会貢献者表彰を頂きましたことを、心より感謝申し上げます。

この栄誉は「人と人のつながり・・・ワンネスマインド」で頂いたものだと思います。国内８つの依存症回復支援施設（奈良、名古屋、沖縄）や、依存症者の雇用創生を目的とした農園（奈良､三重）を担うスタッフたちの日々の努力。相談拠点（東京、横浜、大阪）を担うスタッフたちの地道な取り組み。施設を利用し社会復帰を目指すメンバーやそのご家族に支えられ、さらには施設運営や支援プログラム提供に協力いただく皆さまの存在は欠くことができません。そして、全国各地や海外から私たちの活動を応援してくださる皆さまとつながって、この瞬間も、依存の渦中で苦しむご本人やご家族に助けの手を差し出すことができるのです。

アルコールやギャンブルなどの依存症は、アディクション（addiction / 嗜癖）という言葉でも表現できます。そして､アディクションの解決に必要なのは｢コネクション（connection / つながり）｣なのだという声を、最近耳にするようになりました。私を含むワンネスグループスタッフのほとんどは、それを言葉だけではなく身をもって感じているのです。

依存対象に出会う前から生きることがしんどく、人の輪の中にいても孤立感を抱えていた私たちにとって、アルコールやギャンブルなどがもたらす刺激や高揚感は時に孤立感を払拭し、時に「なりたい自分になれた」感覚を与えてくれました。単なる楽しみの範疇を超えて問題が頻発しても、そんなメリットを手放せずに依存は進行し、結局は孤立していったのです。孤立から抜け出るために使ったアルコールやギャンブ

ルで孤立に至った、その時のどうにもならない苦しみを救ってくれたのは、かつて同じ様な苦しみを経験しながらも脱却していった人たち・・・仲間たちの存在でした。「うん、わかるよ。抜け出したいのに抜け出せないときの気持ちは、私も経験した。」「そうだよね、依存をやめても生きづらいよなぁ。分かる、分かる！」アルコールやギャンブルの存在が問題なのではなく、自身の生きづらさが問題だということを知り、解決の必要があることやその方法があることを知ったのは、まさに「コネクション」があったからです。

私たちは、経験者だからこそ伝えられること、差し出せることがあるとの信念のもとに、北海道は稚内から沖縄の離島まで現地へ伺ってメッセージを発信しています。机上の論理で依存症問題を語らない。どこまでも実際に足を運んで問題に向き合っていく。社会貢献者としての誇りを胸に、これからは助けを求める方々に手を差し伸べていくことに加えて、助けを求めても良いのだと思ってもらえるように依存症の理解促進に寄与する活動も深めてまいります。

▲依存症の回復支援と雇用創生を目指す農園を奈良県と三重県に展開。最近は、貴重な「白いイチゴ」作りに取り組んでいます

▲沖縄施設外観 自然豊かな沖縄県南城市でゆっくり回復に取り組むことができます

▲奈良施設　治療共同体メソッドを軸に国内外の最新プログラムを提供しています

▲学校向け講演 依存症だけではなく「いじめ」「非行」の防止についてもお話します

▲若者向け依存症啓発　大阪の通称「アメリカ村」にて野外ライブを通じ依存症への理解を訴えました

▲女性専用施設 施設内だけではなく野外で四季の移り変わりを感じます